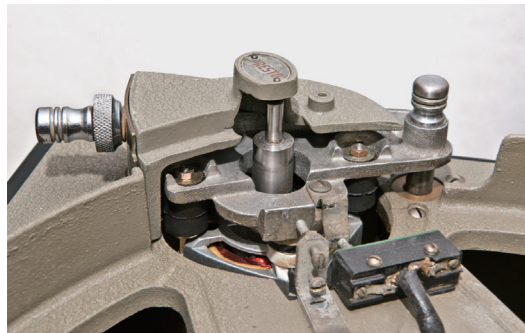
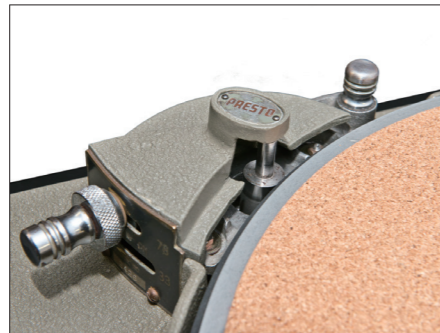


## Presto TYPE-75



本体上部はアルミの一体成形でできている。中央のプーリーは画面左側のレバーをブラッターに押し当てて固定する機構になっている



33回転と78回転の切り替えレバー



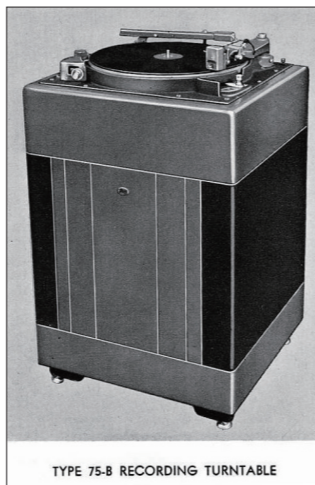
シャフトは少し細めだがブラッターは厚く重量感がある



ブラッターの裏側に刻印されたPresto N.Y. のロゴマーク



TYPE 75-A RECORDING TURNTABLE



TYPE 75-B RECORDING TURNTABLE

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

## 第22回 Presto Recording Corporation 16"ターンの世界③

プレストレコーディング社はアメリカ、ニューヨークに1933年に設立され、1945年頃までアメリカのレコーディング・ディスク・ターンテーブルメーカーのバイオニアであり当時の放送局、学校、スタジオ、政府への高品質な記録装置全般を提供していた。当時まだアメリカではテープレコーダーの存在が無く、録音スタジオや放送局で使う据え置きタイプから持ち運び可能なポータブルタイプのレコードカッティングターンテーブルまで生産していた。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)  
撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



## Presto TYPE-75

1930年代の後期に生産された16インチブラッターモデルで、本体は同じながらポータブルタイプの75-A、据え置きタイプの75-Bがあった。ブラッターの外側に巻かれたゴムの部分にプーリーを押し当てて回転させるリムドライブ式で回転は33と78回転がワンタッチで切り替えできる機構になっている。当時このタイプは録音専用のカッティングアームと再生専用の2本のアームが標準装備されていた。

## Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

## Presto Recording Corporation / Rek-O-Kut 16"ターンの世界③

### Rek-O-Kut Company

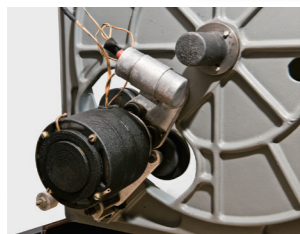
もとはRecord cutting Company から名付けられた会社名で、アメリカではPresto 社より少し後にニューヨーク州のロングアイランドに設立された Recording and Playback 器材を中心に生産していた会社。Presto ほど多くないが12"コンシューマー用のノーマルグレードとハイグレードタイプからプロ用の16"コンソールタイプまでラインアップされていた。

### B-16-H

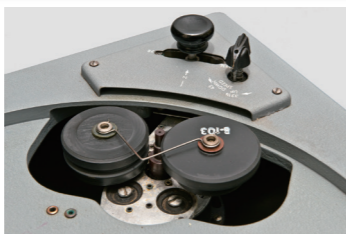
Broadcasting や Recording studio 用に開発された16インチの当社最高機種ターンテーブル。2つのアイドラードで33、45、78回転をコントロールする機構で、33回転側に45回転に切り替えるレバーが装備されている。当時、RCAやFairchild、Prestoに比べると値段も比較的安く33、45、78回転を標準装備していたB-16-Hタイプはアメリカの大小さまざまなラジオ局や録音スタジオで多く使われていた。



シャフトが太く良く響く材質できている



モーター部分は振動吸収のあるゴムが本体との間に挟まれている



2個のゴム製のアイドラードがそれぞれ33、45、78回転をコントロールする



本体上部はアルミの一体成形でできおり、ネームプレートが付いている

音楽の説得力が並大抵ではない  
オーディオ感を変えてしまう魅力

米国放送局仕様16インチ・ブラッター・シリーズは、前回おしまいと思っていたが、アトリエJe-teeにうまく2台も入荷したので、幸いにもこうして第3弾として続けることができた。

上陸した1台は、レコカットのアイドラー・ドライブB-16-H。40年代初期の製造らしく、レバーには33、45、78回転の数字があり、使い勝手がよさそう。なかをのぞくとモーターを始めとするメカ部分がシンプルで壊れてもすぐ直せそうな配置になっている。

もう1台が30年代後期の製造と思われるプレスト社製。レバーを車のギアのようにガチャガチャと上げ下げしてプラッターの外周にアイドラードを当てて回転を変える。その周辺部分は例によって、コストダウンなんてことは頭の片隅にもないほどの肉厚な金属パーツだらけで構成されている。男っぽい魅力にあふれている。

アトリエJe-teeの岡田さんは、せっかくながら301があるのかトリッジとアームを共通にして、3台を聴き比べてみましようと思案してきた。

ヴォーカルがわかりやすいので、69年に発表されたトニー・ベネットの「アイヴ・ガッタ・ビー・ミー」のタイトル曲をテーマにして比べてみる。先発はガラードで、やっぱりこのプレーヤーは力があるなど思ったが、レコカットに切り変えた瞬間、体重の階級が違うんだから比べちゃだめでしょうと可哀相になってしまった。

続いてもっと製造時期が古くなるプレストを聴く。ごっついメカとは裏腹にこちらのほうが分解能はいい。設計も古いのに、これはどういうことなんだろう。レコカットがドーンと音圧で勝負してきたのに対し、ステージが広く声に気品や色気がある。ある時代の雰囲気がある。モーターの回転ノイズを拾ってしまっていることが惜しまれるが、編集者とカメラマンは断然こっちはいいと口を揃えている。ほくはガンガン行っただけ行つたレコカットのアメリカン・パワーが好きだなと思った。

連続でこの種のプレーヤーを取り上げてきたが、50年以上前に、コンシューマー向けのように大量生産したわけでもない。ここまで続けざまに音を聴けるとは本当にラッキーだった。総じて現在普通に流通しているプレーヤーと比べれば、静粛ではないしちよっとしたクセが音にのっているかもしれない。しかし欠点を容認させてしまうほどの音楽の説得力は並大抵ではない。それは多くのオーディオ観を変えてくれたのだ。

まった。というか16インチ・ブラッターが別格的に強烈すぎるのだ。ビッグバンドが背後にいて、トニーがステージの真ん中に立ち、たちまちラスベガスの豪華なシヨウになった。ちなみにスピーカーはエレクトロヴォイスのジョージアン600だ。